
社団法人 日本図書館協会 図書館学教育部会

会 報 第20号

昭和60年11月30日発行 編集・発行 図書館学教育部会

就 任 の あ い さ つ

部会長 裏 田 武 夫

昨今教育文化の面において、かつて日本が経験したことのなかったような深刻な問題がつきつぎに起っております。図書館とて例外ではありません。著作権にかかわる種々の問題、図書館業務の委託、専門職制度、国家試験制度等々、いちいち挙げきれないくらいたくさんあります。これらの状況の中に、日本図書館協会は新しい年度を迎えたわけであり、同協会の一部会としての図書館学教育部会も当然その固有の立場において対応せざるをえないわけであります。

歴史的にみて図書館は社会の中で比較的無風地帯というか、直接荒波をかぶらないで来たと思うのです。それだけ他の職業グループに比べ、足腰が脆弱であることは否めません。したがって、現在日本の図書館をとりまく諸状況を単なる宿命的な困難と受取るのではなく、われわれの専門性に対する歴史的な挑戦と見なして、これに立ち向うべきであると思います。そして一步一步克服するごとに、専門職としての図書館員の社会的地位と評価も少しづつ上っていくものでしょう。結局自分の力でやらなければならないわけで、他人がお膳立てしてくれるわけではありません。

さて、少々大言壮語じみたことを云ってしまったようですが、教育部会は何をすべきでしょうか、どのような在り方がよいのでしょうか。日本では公共的機関に対する公権力の関与がきわめて大きいので、アメリカ図書館協会やイギリス図書館協会のように、民間で図書館員養成機関の格付け認定を行ったり、専門職認定を実施することはたいへん困難であります。したがって問題点の発見と認識、問題点の克服のための対策の検討、館界世論の形成、関係行政機関への意見具申等が主な任務であると思います。そのためには、部会会員の相互コミュニケーションが何よりも大切だと思っております。現在、会報や夏期研究集会、図書館大会における分科会等がコミュニケーションの場ですが、きわめて限られた機会であります。限られた機会ではありますが、私ども役員はよく相談して、よいプログラムを用意したいと思っております。部会員の各位にはできるだけ多く参加していただき、少い機会を活用していただきたいと思っております。そういう事の積重ねの中からきっと部会の大きな任務につらなる光明が見つかるのではないかと考えております。



昭和60年度 図書館学教育部会総会記録

日 時：昭和60年5月31日 10～12時

場 所：日本図書館協会 会議室

出席者：裏田武夫，中村初雄，永田政章，
石塚栄二，鳥居美和子，塩見昇，森崎震二，
平湯文夫，古賀節子，今まど子，高山正也，
渋谷嘉彦（以上12名，委任状26通）

議 長：中村初雄

議事録署名人：鳥居美和子，森崎震二

1. 昭和59年度事業報告（裏田部会長）
2. 昭和59年度決算及び監査報告（古賀幹事）
3. 第14期役員選挙結果報告（高山幹事）

新役員

部会長 裏田武夫（福島大学）

幹 事 古賀節子（青山学院大学）

今まど子（中央大学）

渡辺信一（同志社大学）

高山正也（慶応義塾大学）

渋谷嘉彦（相模女子大学）

監 事 北島武彦（大正大学）

前島重方（国学院大学）

4. 昭和60年度事業計画

- (1) 第17回図書館学教育研究会

日 時：7月17～18日（木～金）

場 所：東京ガーデンパレス湯島会館

テーマ：図書館学教育におけるカリキュ

ラムの構築をめぐる(V)：資

料論の新たな展望

見 学：東芝本社，内閣文庫・公文書館

- (2) 全国図書館大会（仙台市）第7分科会

日 時：10月31日（木）

テーマ：プロのライブラリアンに何を期

待するか——東アジアのライブ

リアンを中心に——

共 催：図書館員の問題調査研究委員会

- (3) 会報発行 第20，21号

5. 昭和60年度予算

昭和59年度 決算報告

収入の部 (円)			
費 目	予 算	決 算	備 考
部 会 費	297,000	295,000	56年度 10,000 57年度 35,000 58年度 72,000 59年度 124,000 新入会員 16,000 60年度 30,000 61年度 16,000
協会交付金	150,000	150,000	利息 530 会報・名簿 5,500 研究会 48,680
雑 収 入	1,000	54,710	
総 越 金	83,185	83,185	
計	531,185	582,895	

支出の部

費 目	予 算	決 算	備 考
事務用品費	1,000	230	出納帳購入
会 合 費	60,000	36,900	
通 信 費	80,000	16,230	
交 通 費	150,000	148,000	
会報等印刷費	80,000	68,600	18-19号印刷
研究会費	20,000	23,680	研究会諸 雑費
選挙管理費	30,000	43,780	アルバイト 等諸雑費
予 備 費	110,185	0	
60年度予算 へ繰越	0	245,475	
計	531,185	582,895	

昭和60年度 予算案

収入の部		
費 目	予 算	備 考
会 費	297,000	2,000×165×0.9
交 付 金	150,000	
雑 収 入	1,000	
繰 越 金	245,475	
合 計	693,475	

支出の部

費 目	予 算	備 考
事務用品費	20,000	
会 合 費	60,000	
通 信 費	50,000	会報切手代等
交 通 費	200,000	
会報等印刷費	80,000	会報20・21号印刷代
研究会等費	110,000	
予 備 費	173,475	
合 計	693,475	

第17回 図書館学研究集会

今回の夏期研究集会は、8月18日から始まるIFLAシカゴ大会に参加される部会員が幹事を含めて多数あることが予想されたので、例年より期日を繰上げ7月17～18日の両日にわたって開催された。テーマは「図書館学教育におけるカリキュラムの構築をめぐる(V):資料論の新たな展望」であった。

第1日目は、新装成った東京ガーデンパレス湯島会館で開かれ、23名の参加者があった。

資料の種類が多様化し、電子出版も試みられている折から、世界最大の雑誌取次会社であるファクソン社の現地法人日本ファクソン社の前社長田中實氏に、学術雑誌の将来を論じて頂いた。次に図書館学教育者の立場から図書館情報大学の黒岩高明氏に情報資料形態論を話して頂いた。

その後の懇親会には、来日中のRobert B. Palmer氏が参加した。パーマー氏は、コロンビア大学図書館の副館長であったが、フルブライトの講師としてネパールの首都カトマンドゥの大学で教え、今回は中国で1年近いレクチャーを終えた帰途であり、参加者と懇談し、翌日の見学会にも参加した。

第2日目は、見学会で30名の参加者があった。午前中は東芝本社へ行き、約1000台のOA機器群と光ファイバーを中心とするローカル・エリア・ネットワーク(LAN)から成る最新のOAシステムに目を瞠った。午後は、内閣文庫と公文書館で、貴重な古書や文書を沢山拝見し、説明を聞かせて頂き、有意義な見学であった。

最新のコンピュータ・システムから平安時代の東大寺文書まで1200年にもわたる時間を体験し、文化の重みを痛感した1日であった。

裏田部会長が、御病気のため入院中で、参加されなかったのは残念であった。

研究集会参加者(7月17～18日)(申込順)
崎本絢子(京都精華大) 源昌久(淑徳大)
柴田光彦(跡見学園女子大) 山本信男(早稲田大学図書館) 野口契子(武蔵野女子大)
岩猿敏生(関西大) 鈴木英二(千葉経済短大) 黒坂東一郎(明治大学図書館) 柿沼隆志(大東文化大) 友野玲子(共立女子大)
小川徹(法政大) 荒岡興太郎(京都精華大) 小山郁子(共立女子大) 永田精一(実践女子大) 渡辺信一(同志社大) 清水正三(元・立教大) 野崎昭雄(東海大) 増井照貴(われら地球世代) 三沢美智子(松商学園短大) 牛島悦子(白百合女子大) 大野鞆子(聖心女子大) 平野英俊(日本大) 田中隆子(関東学院短大) 高山正也(慶応義塾大) 菊地しづ子(学習院女子短大) 渋谷嘉彦(相模女子大) 古賀節子(青山学院大) 今まど子(中央大) 黒岩高明(図書館情報大) R. B. パーマー

第1日 7月17日

学術雑誌の将来

田口 實(ファクソン・プレス)

〔要旨〕

雑誌には記録性を内容的に重んずるジャーナルと、一般の興味を主体的に扱うマガジンとに大別されるが、別にシリアルとピアリオディカルという呼称もある。業界の実践的な立場からの定義では、ピアリオディカルとは、一年の期間内に周期的に二冊以上刊行され、同一誌名を継続使用しているもの、といえる。シリアルとはより広義な意味をもち、一般的な逐次・定期・継続刊行物の総称なので、ISSNも国際標準シリアルズ番号

なのであって、ピアリオディカルズ番号ではない。

シリアルの特徴を業界流に定義すれば、品物の動きに代金決済が伴わないもの、ということになる。品物は生産者から最終利用者に直接送られ、代金決済に関する書類のみが流通経路を経て流れる、という商習慣が外国にはある。日本では年刊あるいは揃物の継続刊行物などは、図書と全く同じ扱いで、品物の動きと代金決済を附随させているが、これは国内の洋書輸入業者が犠牲を払って、図書の流通習慣をシリアルスに援用しているからで、これが当然だということになると、なぜ雑誌が図書に比べて速報性があるか、という説明ができなくなる。代金決済事務から解放され、生産者から利用者に直接情報が渡るから速報性が生れるのであって、編集技術や印刷技術のためではない。

同じように、シリアルの別の特徴である刊行形態の自由度が大きい、あるいは、刊行部数が少なくても存続しやすい、という点も商習慣に基づいている。雑誌購読者の全リストを出版社で保有している例は、日本では会員制の刊行物を除いては、ほとんどないと言ってよいが、外国では出版社から最終読者に直送される学術雑誌が圧倒的多数なので、それぞれのタイトルについて詳細な読者分布調査が可能になる。したがって、類似の新規企画立案に際して、かなり正確に販売見込部数や有効宣伝方法が把握できる。この理由からきわめて小さな学術分野が対象でも、比較的风险が少なく創刊できる。

こういう商習慣による特徴から、十年ほど前に学術情報の主なメディアが図書から雑誌に移ったが、あまりに学術雑誌が数多くなってしまったことから、利用の際に早く適確に必要な文献を探せなくなったという利用者側の理由と、販売があまりに小部数になってしまったために、経済的に限界に達してしまっているという、出版社側の事情の双方がから

み合って、雑誌に代る学術メディアが求められている。

おそらく新メディアは、より少数単位を対象により速報性を求められるので、図書の商習慣からますます離れると考えられる。日本では従来のように取扱い業者が犠牲を払うことが難しくなり、扱えなくなることも考えられるし、そういう商習慣を守る大学図書館にも新メディアは入らなくなるかもしれない。日本だけでなく世界的に、学術情報流通経路は変わるかもしれない。

学術雑誌は年間掲載総論文の二、三パーセント読むべきものがあれば購読すると言われている。残りの大半の部分は利用されず、それを印刷し諸方へ送るエネルギーの無駄、使われる資源の無駄、その他もろもろの無駄が生ずる。また、情報は著者によって生み出された直後から、利用可能な状態におかれることが望ましい。

こういう面での理想を追求し実現しようとしたのが、数年前に発表されたアドニス計画だった。これは著者から送られてきた論文を衛星通信で世界主要国へ送り、受取った各国ではそれを光ディスクに保存して、利用者が電話回線を通じ検索語によって一次文献を取り出す、という構想で、直接原文献を論文単位で即座に入手可能にするという、画期的なアイデアだった。論文単位でということは、利用者ひとりひとり用に、個別に論文誌を編集して届けるという意味を含んでいるので、出版形態上からは販売対象がひとりという特色がある。

これに必要な技術的設備の当初費用が大問題であった。当時の欧州技術を予定しての見積額は、今日からふり返ってみると、現在の日本の最先端技術を使った時の見積額の十倍以上だった。言い方を変えると、わずか三年で技術に要する投資額は一割以下になったのである。技術革新とはまことに恐ろしい性質をもっているもので、かりにアドニスが当時

スタートしてしまったとしたら、今日そのあまりに巨額な当初設備投資で、倒産をしてしまったことだろう。

光ディスクについて言えば、現在でも三カ月にひとつは革新的な新技術が生れている。スタートが遅れば遅れるほど、投資額が少なくなる、ということは、情報単位あたりコストが安くなってゆくという意味である。

コンピュータ・テープのリフレッシュメントはほぼ一年ごとにやらなければならないので、使用せずに単に保存するだけという場合には、テープによるデータ保存は不適当だが、現在市販されている光ディスクは三年以上データ保存可能といわれている。新材料の開発によって、十年以上保存可能製品ができることになり、価格は逆にかなり下がる。十年に一度のデータの入れ直しなら、さほど苦にならないだろうから、長期保存は可能になったと言ってもよいだろう。

さらに設備自体が不要になる場合もある。たとえば光ディスクは、情報を図形イメージで収納するので、ファクシミリを使うとそのまま遠隔通信が可能になる。昨年ファクシミリの新国際規格が決って、きわめて細かなドットで送受信ができるようになったので、ある技術を使えば電子顕微鏡写真まで取扱えることになった。受取り側は光ディスクを設置せずに、ファクシミリを置いておけばよいので、設備費用が大幅に軽減される。

従来の出版概念で言えば、トップに商品を出せば競争相手にはほぼ勝てたのだが、進歩の早い技術に関して言うなら、トップバッターは失敗する危険が多いように思われる。

問題は、必要な情報がどうすれば簡単にとり出せるか、ということになるが、光ディスクは前述のように図形イメージによる記録方式なので、文字を文字として識別できない。したがって検索語を別に編成して、別個の制御用ファイルをコンピュータ内に作る必要があるが、問題はむしろこの別の検索用ファイ

ル作成にあり、本文を光ディスクに収納するスピードに比べて格段に手間暇がかかる。米国議会図書館で雑誌の本文を光ディスクに収納する作業を中止したのも、収納したものをとり出す手続き上の問題があったから、と聞いている。

検索語を個々の論文の著者が作成すると、精粗の差が生じてしまうし、別の人がまとめて作成すると所要時間と経費の問題が生ずる。現在の二次資料の検索における問題と全く同質のことが、ここでも問題になってくる。現時点で言うなら、論文レベルの電子出版は、電子的な設備より、こういう利用技術の方にはるかに経費を要する。商業的に成立するかどうか、まだ疑問なのはこの理由である。

アメリカでは相変わらず小さな新しい構想が、数多く浮んでは消えているが、欧州ではアドニス計画以降まったく静かになってしまった。ところが最近入手した資料によると、昨年11月27日、ECの閣僚級レベル会議で、情報産業に関する五カ年間の実行計画を承認し、その予算として米ドル換算1,800万ドルの資金枠を認め、もし不足なら二年後にさらに追加支出を考慮する、ということが決った。その目的は、欧州における専門的情報市場の開発・育成にあり、また、経済的に成立する規模まで利用の増大をはかり、欧州の独自性を確立することにある。扱う分野は、論文レベル電子出版、材料と資源についての情報を内容とするデータ・ベース、生物技術情報、特許情報、産業情報、EC地域内の地域的均衡の創成にある。

情報資料形態論の構想

黒岩高明(図書館情報大学)

〔要旨〕

メディアの多様化が著しい現代であるが、これらはコミュニケーション文化という一本

の木から花粉が拡がって、新しい木が次々と生れている現象にすぎないと思う。

図書館学を職業教育として受けとめたうえで、資料論（図書館情報大では情報資料形態論）の図書館学教育における位置、その内容、資料の類別、情報資料形態比較について紹介する。

1 図書館学と資料論

図書館学は多次元の分野を取り扱う複雑さをもっている。資料論はそのなかで基本となる要素の一つである。

人間の思考過程から情報発生、分類、利用にいたる基礎論をベースに、それをとりまく社会関係論、新しく加わったコンピュータ科学がある。資料論の教育にあたっては必ず組織論、経営論をも考慮に入れるべきである。

2 資料論の範囲

まず、資料を図書により代表される印刷媒体、文字メディアだけでなく記録媒体全体を対象としてとらえ、生産から利用までにかかわるすべてを扱う。

収集は社会関係論と、参考調査は組織論と、データベース論はコンピュータ科学と、それぞれ密接に関係づけ、資料論のなかで論ずる必要がある。

保存については、最近の紙の劣化問題を待つまでもなく、当然、資料論での重要課題である。

3 資料の類別

コミュニケーション論からスタートし、近年の技術革新にともなって多様化し複雑化したメディアの類別に至るべきである。したがって記録媒体についての資料論の守備範囲は拡げるべきであろう。

形態別、対象別、利用別、主題別、発行者別、刊行形態別など類別の例であるが、これらをどのように組み合わせて教授内容とするか

が問題となろう。現在は、形態別資料論のみを担当している。物理的形態のみでなく、なぜその形態をとるかという観点からコミュニケーションメディア論を考え、具体的には記号系、図形伝達系に分類する。

4 情報資料形態比較論

形態比較論が必要となった理由として次の点があげられる。第一にメディアが多様化したので各メディアの特性を理解する必要が生じた。第二に、記録メディアで再生装置を不可分にするものが増加した。コンピュータ処理のデータを“機械可読”というが、レコード、映画、ビデオも同じことで多くの再生装置が作られ、使いやすくなった。第三に、書誌記述上の問題点が多くなり、メディアの規格統一の必要性が高まっている。すなわち、業者が作る新しい規格をもつメディアが次々と生まれ、それを理解し認識していないと目録規則すらも理解できなくなる。

最後に現在は下記の構成で授業を進めている。

総論

各論 文字媒体（図書を除き逐次刊行物、パンフレットなど）

画像媒体

図像資料（Graphic material
—ハードコピー）

映像資料（ビデオ撮影、スライド
作成など実習

—ソフトコピー）

録音資料

マイクロ資料

以上を授業時間数としては20コマ、3学期制の2学期分で行っている。

（記録：牛島悦子）

第2日 7月18日

東芝本社見学記

永田 清一 (実践女子大学)

国電浜松町駅下車、シェルター付きの歩行者デッキを抜けると高さ165mの東芝ビルディング(地下3階,地上40階)が見える。高さでは8番目(1番サンシャインビル)だが、広さでは1番目(165,675㎡)であるという。シルバーグレーのエントランスホールには人工衛星と未来の原子炉「人工の太陽」といわれる核融合炉の模型(1/15)が置かれエネルギーとエレクトロニクス(E&E)技術を結集し、先端技術をオフィスに導入しようとする意気込みが感じられる。

22階が総合受付。その見学者控室でビデオにより東芝の一日の活動をみる。社員7000名が27台の高速エレベータに乗り各フロアの部署につく。各フロアは4つのオフィスで構成され、A.C.ゾーンが緑で山側、B.D.ゾーンが青で海側であることを示している。ビデオを30分ほどみて、東芝の志田さんの案内で、18階のAオフィスの日常業務を見学する。社員は磁気方式のIDカード(数字8桁の従業員証)を持ち、これを出退勤の記録、食堂のキャッシュレス、現金出納に利用している。各フロアに印刷物、郵便物等を書類搬送機で自動的に配送するメール・ステーションがあり、テレビ回覧板や収納庫の文書ファイルは綴じこまないなど、レスペーパー、レススペース、レスタイム、レスキャッシュを目指していることを知る。OAデモンストレーションルームではTOS File(画像情報ファイル装置)、電話帳システム、会議室・応接室予約システムの実演、複写印刷システム、用度品払出しシステム、電子メールといったTOTAL OAアプリケーションを見聞する。次に38階のデジジョン・ルームに案内される。ここはトップマネージメントに的確な情報を提供する映

像ホールで正面奥に100インチの高精細なスクリーンがあり、静止画像はもちろん、動画も天井に組み込まれたビデオプロジェクターにより、カラーで鮮明に映し出される最先端のAV機器とコンピュータを結びつけた役員会議室で、窓からは東京湾全体が眺望できる超デラックスルームである。

役員気分になったところで参加者の関心ある30階の情報センターの見学である。明るい室(540㎡)に整然と資料がUDCにより配架され、端末機が各所に設けられている。事務室といった所はなく、カウンター内のコーナーで若い女性が一人、社内資料の頁を繰りながらTOS File業務を行なっている。このTOS Fileは30cmの光ディスクに約6万枚(第15回研究集会で見学した松下電器技術本部のパナファイルは20cm,1万枚)のA4判画像を1時間に150枚ほど記録するもので、社員は情報センターに出向かなくても各フロアの端末で検索できる仕組みである。それは、このビルが生物の神経系と同じように縦に貫く光ファイバケーブルと、各フロアごとに横に伸ばされた同軸ケーブルから成り立ち、ビル全体に情報の伝達路が張り巡らされているからである。世界をカバーする120の拠点、4,000端末の情報通信システム、全コミュニケーションを紙に代わりエレクトロニクスする社会、これが東芝OAビルである。情報センターも分散していた図書室を一カ所に集結し名称を改めて本社総合企画部に所属させ、ビジネス情報(蔵書数:約16,000冊、雑誌:約650種)を7名の職員(男4名、女3名)が取扱っている。技術情報は総合研究所が技術情報データベース(YOURS)でサービスしている。資料は特別なものを除いて最長10年間(一般的には3年間)保管し、最終的にはTOS Fileに入力したのち廃棄するという。(『情報管理』1985年4月「東芝情報センターの活動」参照)知的文化財とは何かを考えながら次の見学先である国立公文書館へ急いだ。

国立公文書館・内閣文庫見学記

荒岡 興太郎 (京都精華大学)

わが国の国立公文書館は諸外国の公文書館と異なり、単に国の行政各機関から受入れた公文書を分類、整理し、これらを閲覧、展示などに供するという本来の仕事の外に、第一級の和漢の古典籍、古文書も所蔵している。これらには公文書に類する資料も多く含まれており、歴史的に内閣文庫として、内閣・総理府が所蔵していたという経緯から、国立公文書館の設置に際し、これらの資料を吸収することになったそうである。この内閣文庫の中には江戸幕府の紅葉山文庫、昌平坂学問所本、塙保己一が新写、収集した和学講談所本、多紀家歴代の校訂した古医学の医学館本等、学術的価値の高い資料が多い。これら内閣文庫の資料の中から最重要な23点の資料をわれわれ一同のためにわざわざ展示して下さった。後に述べる公文書の展示と共に内閣文庫、公文書館の方々に感謝したい。

次に公文書館に移るが、ここで所蔵されている公文書は次の通りである。

- (1) 新・旧憲法、詔書、法律、勅令、政令の公布原本である御署名原本
- (2) 太政官記録課において太政官日記及び日誌、公文録などから典例条規を採録・浄書し、制度、官制、官規、儀制等19部門に分類し、これを年代順に編集した太政類典
- (3) 上記の太政類典を内容に則して明治15年から改称した公文類聚

(4) 公文類聚に収録されなかったもので内閣で授受した文書を明治19年から各省庁別、年次別に編集した公文雑纂

(5) 太政官において授受した明治元年から18年までの公文書の殆どを各省庁別、年次別に編集した公文録

特にこの公文録は明治初期における政府記録の根幹を成すものである。

これら公文書37万冊が地下4階からなる書庫にびっしりつまっている。これらの資料は日本の政治史を調査研究する者にとっては、まさに宝の山である。諸外国に遅れたとは言え、日本にも公文書の散逸防止を目的として国立公文書館が創設されたことは誠に喜ばしいことである。

公文書の中からも重要資料10点を特別展示して頂いた。その中には板垣退助等の民撰議院設立建白書があり、内閣制度創始に関する詔書がある。後者の資料には悪筆を自認して字を書かなかったと言われている大隈重信の署名も見られる。その他、大日本帝国憲法、日本国憲法、終戦の詔書の御署名原本があった。

館内見学の際、内閣文庫や公文書館の古い資料を補修する製本室や書庫内を常時一定の温度や湿度に保つ空調室も見学した。

製本室では傷んだ本を熱心に裏打ちしている人達、また空調室では担当者が毎朝テレビの天気予報を見てから出勤するという話も聞いた。公文書館に所蔵されている資料もこれら裏方の仕事をしている人達によって立派に保存がなされているのだということを実感して、見学を終えた。

トピックスー海外から

司書職制度確立への試み

— 中国における大学図書館員
の資格づけについて —

松戸 保子 (上智大学図書館)

今年の夏に1カ月ほど中国北京市にある清

華大学図書館で、指導を兼ねながら働く機会があった。その折に、北京大学図書館をはじめ、幾つかの大学図書館を訪問したが、主な話題の一つは、やはり職員の問題であった。

館長は日本の場合と同様、教員による兼任が多い。副館長は、職員の数に150人前後の大規模な図書館には通常3人位はいる。これ

らの副館長にも教員をあてることが多いらしい。もともと図書館の専門家ではない副館長は、外国に留学や研修にでかけたり、国内外の会議に出席したりして、一生懸命に図書館学の知識をつめこんでいるように見受けられた。

ここでは、たまたま今年から中国において試行に入ることになった、大学図書館員の資格づけについて紹介したい。過去に全くそのような制度がなかったわけではなく、今回はその改訂版と聞いている。これは、国家の教育委員会(委員会というのは、日本における省などより組織としては上であるとのこと)の指導により、大学図書館からの代表が集って基準委員会(仮称)を設け、そこで審議・検討されたものである。それによると、大学の図書館員の資格は次の5段階に分けられることになる。

1. 研究館員(教授と同じ資格)
2. 副研究館員(助教授と同じ資格)
3. 館員(講師と同じ資格)
4. 助館員(大学卒以上)
5. 管理員(高校卒2年以上・短期大学卒1年以上)

この5段階のいずれにも、その基盤として、図書館・情報学の知識が要求されることであるが、図書館員の専門性を認めることでもある。北京大学や清華大学などを含む北京市、および上海市にある合計七つの大学図書館の職員を対象にして、まずこの資格の適用をはじめてみることになった。この試行の成果をみて、全国の大学図書館に広め、標準的な基準として決定することである。

この大学図書館員の資格の制度化の背景には、もちろんそれなりの事情がある。一つには、日本と同じく中国においても、専門職と云われている他の職業——医師、教師、技術家、法律家など——には、それぞれ既に資格制度がありながら、図書館員にはまだ適切な

ものがなかったということ。このほかに、図書館員の社会的な地位を高め、大学図書館に優秀な人材を集めること。と同時に、図書館員も努力次第で昇格の道が開けるといふ動機づけを与えて、仕事の業績をあげたいという意図もあるらしい。

この例は大学図書館の職員に限っているが、日本において、大学図書館員の身分や待遇の保障がいまだに一定していない現状に比べると、中国のこの国家的支援による積極的な取り組み方は、かなりの示唆に富んでいると思われる。日本でも司書職に関する停滞した状態を何らかの方法で脱却しないかぎり、中国に遅れをとることにならないか。

~~~~。~~~~。~~~~。~~~~

### R. B. ダウンス博士

昨年春の叙勲の折に、勲二等瑞宝章を受けられたイリノイ大学の名誉図書館長ロバート B. ダウンス博士を、筆者は去る8月アーバンの自宅にお訪ねする機会を得た。

ダウンス先生は、今年のお正月頃までは図書館に調べ物をしにお出になっていて、お元気だったが、春に家の中どころばれてからはすっかり弱られたとのジェーン夫人の説明であった。声も細く、歩行器の助けが必要な御様子だったが、それでも古いアルバムを見乍ら日本の思い出話をなさって、おだやかな笑顔は変らなかった。二年前にコロンビア大学図書館学校時代に知り合われたエリザベス夫人を亡くされたが、その後有名な Louis Round Wilson 博士の姪ジェーンさんを迎えられ、静かな日々を過ごされている。L. R. Wilson 博士は、ダウンス先生のノース・カロライナ大学時代からの恩師である。ジェーンさんもライブラリアンで、児童文学や児童文献に関する著作がある。

先生は、御自分の知っている日本の友人によくとの伝言をくり返し託された。(今)

## 幹事会記録

1985年1月25日 (裏田, 今, 古賀, 渡辺,  
細野, 渋谷, 高山)

- (1) 第14期部会役員選挙の件
- (2) 図書館年鑑1985年版部会原稿の件

1985年4月3日 (裏田, 古賀, 今, 渡辺,  
高山, 渋谷)

- (1) 選挙結果報告
- (2) 部会総会対策
- (3) 全国図書館大会分科会企画

1985年5月13日 (裏田, 古賀, 今, 渡辺,  
渋谷, 高山)

- (1) 全国図書館大会分科会準備
- (2) 部会総合プログラム作成
- (3) 昭和60年度部会予算案の作成

1985年6月3日 (古賀, 今, 渡辺, 渋谷,  
高山)

- (1) 図書館学教育研究会企画

1985年7月6日 (古賀, 今, 渡辺, 渋谷,  
高山)

- (1) 図書館学教育研究会企画
- (2) 部長入院につき, お見舞の件

1985年10月4日 (古賀, 今, 渋谷, 高山)

- (1) 図書館学教育研究会収支報告
- (2) 全国図書館大会(仙台市)の打合せ
- (3) 会報第20号編集

## 会員消息

### 新入会員

昭和59年度

沢井清(宮城学院女子大) 内藤衛亮(東大  
文献情報センター) 緑川信之(図書館情報  
大) 武者小路信和(大東文化大)

昭和60年度

野崎昭雄(東海大) 三沢美智子(松商学園  
短大) 校條善夫(中部日本放送) 山田寿  
春(第一経済大) 西田真一(近畿大通信教  
育部学生)

## 異動

- 裏田武夫氏は福島大学教授に就任。
- 北島武彦氏は大正大学教授に就任。
- 高宮秀夫氏は昭和女子大学教授に就任。
- 長倉美恵子氏は学芸大学助教授に就任。

## 退会者

安西郁夫 菊地真一 末吉哲郎 七宮氏子  
松谷忠治 宮地見記夫 もり・きよし

## 訃報

服部金太郎氏は2月14日に74才で逝去され  
ました。謹んで哀悼の意を表します。

## 部会費納入のお願い

昭和60年度の部会費(2000円)を未納の  
方は下記の口座にお納め下さい。

○郵便振替口座 東京9-16114 日本図書  
館協会図書館学教育部会

○銀行口座 第一勧業銀行世田谷支店 普通  
口座番号1351781 口座名:日本図書館協  
会図書館学教育部会

○恐れ入りますが振替手数料も御負担願います。  
○協会に直接持参されたり, 協会の口座に振  
り込まれますと, 入金が遅れたり, 手続きミ  
スがる場合がありますので, 上記の口座を  
御利用下さる様お願いいたします。

(会計担当 渋谷嘉彦)

## 編集後記

会報第20号をおとどけ致します。部会総会  
の記録は図書館雑誌79巻8号と重複しますの  
で, 簡単な記録に致しました。夏期研究会  
の報告を中心に, 今回は中国に招かれた松戸  
保子さん(上智大学図書館)の中国司書職制  
度についての見聞記を書いて頂くことができ  
て幸いでした。我々にも良い示唆となるでし  
ょう。(今 まど子)